

令和の「札幌丘珠事件」だと思った。昨年六月、ヒグマが札幌市東区の市街地を駆け抜け、次々と市民や自衛官を襲った。男女四人が重軽傷を負い、クマは丘珠空港の近くで駆除。一九〇万人以上が暮らす道都の市街地で、信じられない光景が繰り広げられた。

「元祖」の札幌丘珠事件は一八七八年（明治一年）一月、丘珠村（現札幌市東区丘珠町）で発生。冬眠から起こされたクマが猟師らを次々と襲い、三人が死亡、二人が重傷を負った。それから百四十三年。当時の開拓から間もない寒村風景とは様変わりし、市街化された同じ丘珠にクマは再び姿を現した。

道内では昨年、クマによる人への被害が相次いだ。死者は渡島管内福島町で農作業中だった女性など四人、重軽傷者は東区の方を含め八人に上った。死傷者計一二人は統計開始の一九六二年以来最多だ。

道内第二都市の旭川市の市街地にも連日のようにクマが出没した。東区や旭川の例で顕著なように、クマと人が住む区域の境界線が曖昧になっている。原因として人口減少による里山の荒廃や山のえさ不足が取り沙汰されるが、見逃してはならないのは時の行政や政治との関係だろう。

クマと行政、そして政治

道内のクマの生息頭数は、道が九〇年に「春グマ駆除」をやめてから増加が目立ち始めた。この駆除は、人畜への被害を未然に防ぐため六六年から冬眠後の時期に行われ、クマの生息数は減少した。そこで「人間と自然の共生」を掲げる当時の横路孝弘道政は、駆除一辺倒から保護へと姿勢を転換し、春グマ駆除を廃止。その後、道内のクマの生息数は回復し、近年は山から降りて市街地に現れるようになり、人を恐れないうちも目立つようになっていく。

もう一つ、市街地への出没に関係しているとみられるのが河畔林や用水路、国などが進める「緑の回廊」構想だ。河畔林は水害対策などのために整備されているが、クマは川沿いに移動することが多いとされ、東区に出没したクマは水路を伝って市街地に近づいたという。緑の回廊は分断された林をつなぎ合わせ、野生生物の移動経路を確保する構想だが、これがクマにとっても市街地に近づく通り道となる。

人里に現れるクマに、どう向き合っていくべきなのか。野生動物の保護や生物多様性の大切さが叫ばれる中で声高には言いたいが、住んでいる人たちの不安を思えば、街に出没するクマの駆除はやはり必要だろう。その判断を下すのは行政。その個体の

危険性や周囲の状況を踏まえ、冷静に決断しなければならぬ。さらに人への被害を未然に防ぐには、人里に降りるクマを減らし、頭数をコントロールすることも求められる。国民の生命・財産を守ることは行政・政治の使命であり、責任は重い。

ところが、道議会や国会でクマ対策が語られることは少ない。野生動物の保護という建前と、被害を防ぐ駆除という現実の折り合いをどうつけるかは極めて政治的な判断だが、政治の場での議論は低調だ。専門的な職員も少ないままだ。

人口減少が進む中、ハンターも高齢化し、今後もクマの数が増え続ければ、丘珠事件や、大正期に現在の留萌管内苫前町で七人が死亡した「三毛別（さんけべつ）事件」のような悲劇は昔の話ではなくなる。人間のエゴと言われればそれまでだが、日常的にクマにおびえて暮らし、安心して散歩もできないような将来を道民が望んでいるとは思えない。クマとの関係は道民生活にかかわる重要な課題だ。人と野生動物との共存は生息数の適切な管理が必要で、そこには行政や政治の指導力が欠かせない。道議会や国会の場はもちろん、来年春に控えた知事選や道議選で、もっと議論があつていい。

ハ転V